

国語 (1)

解答番号

1

34

I

次の文章を読み、後の問い(問一～問十一)に答えよ。(50点)

アウグスチヌスは言います。

実際、私は以前の楽しかったことを今^{おも}思い起こしても、それほど楽しくはないし、また昔の私の悲しみを今思い出してもそれほど悲しくはないのだ。また、かつて恐れていたことを今思い出しても恐ろしくはないのだ。さらに、昔の欲望を思い出しても、今は欲望を起こすことはないのだ。

もう一四年も前のことになりましたが、私はそのころウィーン日本人学校で英語教師として働いていたのですが、同じ英語教師である英国女性の授業を批判すると、「あなたは英語ができないのだから批判する資格はない」と言われ、えんえんと喧嘩^{けんか}するという苦い経験をしました。それを、今まで^Iさまざま^Iな仕方^Iで語ってきましたが、今や「彼女が憎い」と語ってもじつはそれほど憎くなく、「殴ってやればよかった」と語ってもじつはその欲望はないことがわかります。そして、私は記憶にもとづきながらも、さまざま^aな「長さ」でさまざま^aな「思い」を込めてあの事件を語ることができるのです。

ラッセルは記憶が文字通り過去のジショウと同一の内容を保持するのではないことを、他人を再認する場合を挙げて巧みに説明しています。もし私がウィーンの街角である英国婦人にバッタリ出会ったとしたら、たつぷり一四年分彼女は歳^{とし}をとっており、もちろん服装も違う。しかし、私は彼女をただちにハンベツ^bできるでしょう。これこそ「再認」であり、こうした事例にもとづいて「再認の本質は反復された刺激と新しい刺激とのあいだの違いにある」とラッセルは言うのです。

「想起すること」とは、何ら損傷もなく保存された過去の内容をそのまま引き出すことでないことは、じつは誰でも知って

いる。もし想起が文字通り「再現」なら、ベートーベンの第九交響曲を想起するには一時間半かかることになり、昨年の夏休みを思い起こすには——眠っていたときを除いても——一カ月以上かかることになりましょう。つまり、人生を何十度も繰り返すほどの時間が与えられていなければ、われわれは想起できないことになりましょう。

多くの人は、こうしてわれわれがさまざまな仕方
で記憶を「呼び戻す」ことができることから、次のように考えるのではないでしょうか。われわれは想起内容をさまざまな観点からさまざまな仕方
で語り出すことができるが、このことが可能なのはやはり過去の「原型的記憶」が保存されているからだ。折々の想起とは、こうした過去の「原型的記憶」のうち、われわれがその時々
の関心によってその断片を切り取ることなのだ、と。

記憶は一般に時間が経つとともに「ぼんやり」してきます。そして勘違いも多くなってくる。だが、その場合でも原型的記憶にいつさいの損傷はなく、時間が経つとそれを想起
す能力が弱まってこの原型的記憶をうまくすくいあげられないのだ。原型的記憶はつねに大脳の中にしっかりとしまわれているのだが、時間が経つにつれて、それをうまく取り出せなくなる、というわけです。

原型的記憶というお話は、——ちょっと反省してみればわかることですが——すべて空間的な知覚（視覚）を記憶の場合に転用したものです。遠くのビル群がぼんやり霞んでおり、どのビルがAビルだか判定しようとするとき、まぢが**い**も多くなる。この場合、Aビル自体はちゃんとあそこにあり、近くで見ればそのとおりはつきり見えるのだが、それから遠ざかったためにそれを識別する能力が弱くなって、「原型的知覚」をうまくとらえられないのだ、という図式とピッタリ重なります。

知覚の場合でも問題は残るのですが、それは今 **A** としまして、ここには空間的場所とまったく平行に時間的場所が前提されている。ある過去の出来事Eは、固有の空間的場所にあったと同じく固有の時間的場所にある。そして、Eを一〇年後に想起するとは、Eを一〇キロメートル離れて知覚することと同一の構造をしている、という前提です。

しかし、こうした知覚とのアナロジーはあらゆる側面で破綻を **B** に見ている状態と想起している状態とを比較してみれば、その大きな違いは明らかです。遠くのビルでも私が見ているときは、そこに登場してくる光景には細部にわたる

まで固有の色・形・質感がある。しかも、私はある固有の視点からビルをその背景の全体とともに見ており、同時に裏側に回ったり、空から見下ろしたりすることはできない……。

しかし、昨日見たこの光景を今想起している場合は、様子はまるで違っている。ビルは何となく「見える」ような感じもするが、背景はぼんやりとしており、私は自由に視点を変えてその光景をとらえることもできる。だが多くの場合、憶おぼえていない数々の部分があつてよく「見よう」としても、そのビルのすぐ隣の光景すら思い出せない。空は真つ青に晴れていたのだが、想起した空はまったく青くない（あえて言えば灰色です）。ビルもゴツゴツしたコンクリートの感触はない。その光景はともも眩まぶしかったのだが、想起した光景は全然眩しくない……。

というように、アウグスチヌスの挙げる喜び・悲しみ・恐れ・欲望といったストレートな心理状態ではなく「知覚」の場合でも、知覚とその想起とは比べれば比べるほど違うのです。それにもかかわらず、同一、の光景であるという確信を私はもつ。そうです。両者は **ア** のレベルで同一なのであつて、その存在の仕方はまったく異なるのです。

想起とは知覚よりも **イ** 「眩しい真つ青な空のもと遠くにビル群が見える」という文章を読んでその光景を思い浮かべる状態に近いのです。これでは、どんなビル群かわからないという人には「新宿副都心の」という言葉を加えれば、光景は **ウ** 具体的になる。そして、言葉を次々に付け加えてゆけば、どこまでも具体的に細部にわたって思い浮かべることができようになります。

たしかに、こうした文章から生ずるイメージと現実の光景の想起とはまるで異なつた一点があります。それは、想起はかつて現に体験したことの想起だという点ですが、このこと⁵によって想起が文章的だということ⁵を少しも変える必要はない。つまり、想起とはこうした「現に知覚した」という直観を伴つて、かつての体験を文章的に思い浮かべることなのです。しかし、ここに混同が起こり、想起には「現に知覚した」という直観が伴っているがゆえに、ふたたびそれを疑、似的に知覚していること、（ぼんやりと知覚していること）と思ひ違ひしてしまうのではないでしょうか。

（中島義道『「時間」を哲学する』による）

注 アウグスチヌス——古代末期のキリスト教の教父、神学者、哲学者、聖人（三五四―四三〇）。教会の絶対性を認

めた理論は、中世ヨーロッパに大きな影響を与えた。

ラッセル——バートランド・ラッセル。イギリスの著名な哲学者・数学者（一八七二―一九七〇）。『数学の諸原理』
を著して後の論理学に多大な影響を与えるなど、数多くの業績がある。

問一 文中の二重傍線部 (a・b) のカタカナを漢字に直したとき、同じ漢字を用いるものを、次のそれぞれの選択肢の中から選べ。

a ジシヨウ

- 1
- ① 自らの権力を誇ジする
 - ② データをジ系列に並べる
 - ③ 役員就任を固ジする
 - ④ 順ジ結果を公表する
 - ⑤ 一連のジ案を処理する

b ハンベツ

- 2
- ① 辞書の巻頭にあるハン例を見る
 - ② 二人の意見は相ハンする
 - ③ 夜ハンに目がさめる
 - ④ 古代の文字をハン読する
 - ⑤ 模ハン解答を作成する

問二 文中の波線部 (i・ii) の意味として最も適当なものを、次のそれぞれの選択肢の中から選べ。

i えんえん

- 3
- ① 不快に感じるが続くこと
 - ② 方向を変えながら進み続けること
 - ③ 途切れることなく続くこと
 - ④ 想像を超えて永遠に続くこと
 - ⑤ 何度も繰り返し返しながら続くこと

ii 折々

- 4
- ① 何らかの機会があるその度
 - ② ようやく実現したその機会
 - ③ 何度目かに繰り返し返されたその時
 - ④ 季節が移り変わるその時節
 - ⑤ 偶然が生じたその場合

問三 文中の破線部（Ⅰ～Ⅲ）を別の語で言い換えるのに最も適当なものを、次のそれぞれの選択肢の中から選べ。

- | | | | | | | | |
|---|-------|----------|---------------------------|-------|--------|-------|-------|
| Ⅰ | さまざま | 5 | ① 数多 <small>あまた</small> の | ② 雑多な | ③ 不統一の | ④ 各種の | ⑤ 異質な |
| Ⅱ | まちがい | 6 | ① 錯誤 | ② 混乱 | ③ 語弊 | ④ 過失 | ⑤ 粗相 |
| Ⅲ | アナロジー | 7 | ① 比較 | ② 調和 | ③ 密着 | ④ 類似 | ⑤ 通用 |

問四 文中の空欄（A・B）を補うのに最も適当なものを、次のそれぞれの選択肢の中から選べ。

- | | | | | | | |
|---|----------|---------|--------|-----------|---------|---------|
| A | 8 | ① あげる | ② ならべる | ③ ぬぐう | ④ たてる | ⑤ おく |
| B | 9 | ① つくります | ② 呼びます | ③ くつがえします | ④ 食らいます | ⑤ きたします |

問五 文中の傍線部1〈再認の本質は反復された刺激と新しい刺激とのあいだの違いにある〉とあるが、どうということか。その説明として最も適当なものを、次の選択肢の中から選べ。

10

① 過去に何度も反芻^{はんすう}してきた強い感情が変容をしている事実を自覚させるといことが、再認の基本的な性質であるということ。

② 過去に経験した事柄と新たに認識している事柄との間に共通点が見いだせないということが、再認の基本的な性質であるということ。

③ 繰り返し想起してきた事柄と現に捉えている事柄との間に相違があるということが、再認の基本的な性質であるということ。

④ 過去に反復された記憶を思い出す際に契機として別の新たな経験が関与するといことが、再認の基本的な性質であるということ。

⑤ 何度も思い起こしてきた事柄といま想起している事柄との間に多くの食い違いがあるといことが、再認の基本的な性質であるということ。

問六 文中の傍線部2〈過去の「原型的記憶」が保存されている〉とあるが、「原型的記憶」とはどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の選択肢の中から選べ。

11

① 完全な形で残され、過去について語る際の参照元となる記憶

② その時々^{ときどき}の想起の仕方の影響を受け、表面的には変容をしている記憶

③ 意識の底に沈み、「呼び戻す」には時間のかかる記憶

④ それに関する語りを司^{つかさど}り、不完全ながらも過去を体現している記憶

⑤ 時間の経過とともに変化していく前の原初の姿とも言える記憶

問七 文中の傍線部3〔「原型的知覚」をうまくとらえられないのだ、という図式とピッタリ重なります〕とあるが、「ピッタリ重なる」はどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の選択肢の中から選べ。

12

① 空間の中で知覚された対象と想起された対象は、たとえばどちらも特定のビルであるというように物体としては同じもので、両者の輪郭は相似の関係にあるのだということ。

② 出来事からどれほどの時間が経過しているかによって鮮やかさが異なるという記憶の特徴は、事物とどれほど距離が離れているかによって鮮やかさが異なるという知覚の特徴と、きれいに合致しているということ。

③ 原型的知覚を取り出すにはそれなりの能力が必要だということ、原型的記憶を取り出すにも同様の能力が必要だということとは、どちらも認識する者の属性に依存しているという意味で、きれいな対応関係にあるということ。

④ 空間を知覚する際に遠くのがぼやけて見えるという現象の理解に、記憶において遠い過去を想起する際にまちがいが生じやすいという現象を適用して考えてみると、両者の間には同様の構造が見出せるといふこと。

⑤ 知覚経験がなされたものが記憶となって脳内に保存され、それを取り出すのが想起であるから、想起は過去に知覚によって得た認識の上をなぞるような行為だと言えるということ。

問八 文中の傍線部4（見ている状態と想起している状態とを比較してみれば、その大きな違いは明らかです）とあるが、この違いを「見ている状態ではX。しかし想起している状態ではY」と表す場合、XとYに当てはまる組み合わせとしてふさわしくないものを、次の選択肢の中から選べ。

13

- ① X 視覚で捉えた色をそのままその対象の色と見る | Y 対象の色が観察した色と異なる
- ② X 空からも背後からも同時には見られない | Y 同じ対象を自由な視点から捉えられる
- ③ X 遠くの対象の細部まで明瞭に識別できる | Y 遠くのもの細部が見えない
- ④ X 知覚対象だけでなくその背景も同時に捉えられる | Y 背景が認識できない
- ⑤ X 知覚対象から得た印象をそのまま感じ取る | Y 実際に見たものと別の印象をもつ

問九 文中の空欄（ア）を補うのに最も適当なものを、次の選択肢の中から選べ。

14

- ① 視覚
- ② 記憶
- ③ 概念
- ④ 現象
- ⑤ 想起

問十 文中の空欄（イ・ウ）を補うのに最も適当なものを、それぞれ次の選択肢の中から選べ。ただし、同じものを繰り返し選んではならない。

15

16

- ① だからこそ
- ② 逆に
- ③ より
- ④ それだけに
- ⑤ むしろ
- ⑥ かわりに

問十一 文中の傍線部5(このことによって想起が文章的だということをし少しも変える必要はない)とあるが、筆者はなぜこのように言うのか、その理由として最も適当なものを、次の選択肢の中から選べ。

17

① 想起の対象が知覚した事柄であるからといって想起そのものを疑似的な知覚なのだと思える必要はなく、文章によって思い描くことと同じだと考えても何ら矛盾は生じないから。

② 知覚体験によって得られた認識は、言葉を用いなければ知識として脳内に保持できないのは確かだ、想起を文章的であるということには十分な根拠があると考えるべきだから。

③ 知覚と想起とがずいぶん異なるということは多くの例が示すとおりで、想起される内容が知覚体験を基盤としているという程度の反証では、想起が知覚と類似しているとは言えないから。

④ 文章を読んでその内容をイメージすることと想起との類似性を認めることは、言葉を付け加えればいっそう細かなイメージがわくことから見ても妥当な考えで、疑問をさしはさむ余地はないから。

⑤ 想起を文章的ではなく知覚に近いと考えることは、想起の対象が知覚体験であることに惑わされた愚かな人の考えることで、考慮する必要はないと考えられるから。

II

次の文章を読み、後の問い（問一～問十）に答えよ。（50点）

私がちよつと気に入っている、こんなエピソードⁱがあります。

ある父親がドイツ語を覚えなければならなくなったとき、その子どもは一歳の誕生日を迎えるところでした。そこで父親は考えたのです。

まだ言語を話さないこの子も、あと二、三年もすれば、ⁱⁱ流暢に日本語を話すようになるだろう。ということは、自分もこの子の日本語と一緒にドイツ語を覚えていけば、二、三年で日常生活に困らないドイツ語が身につくということだ。

そうして始めてみると、初めのうち、子どもが話す単語は「マンマ（食べる）」と「ママ（お母さん）」から、なかなか増えていきません。それで父親の方も、「エッセン（食べる）」と「ムッタア（母）」だけ覚えて悠々としていました。

ところが、しばらくすると、子どもが話すことのできる単語の数は急に爆発的な勢いで増え始めます。と思ったら、子どもはそれらの単語をつなげて文まで話すようになり、さらには、話せる文の種類もどんどん増えていきます。こうなると、父親はもう子どものペースについていくことができせん。そして子どもが三歳になったとき、父親のドイツ語は、子どもの話す流暢な日本語に、まったく歯がたたなかつたのです。

それでは、子どもがことばを話せるようになっていくときの、爆発的な勢いとはどれだけのものなのでしょうか。ざっと子どもの言語発達の過程を追ってみましょう。

¹ 子どもが初めて単語らしきものを言うのは、一歳の誕生日の頃です。

子どもの話す単語は、「マンマ」や「ブーブ」など、子どもにとって言いやすい音のかたちをしていることがほとんどで、「ゴハン」や「ジドウシヤ」など、大人がふだん使う単語をそのまま口にする²のは、むしろまれです。大人が使うのと違う音のかたちをしていても、「この子は自動車を見るといつも『ブーブ』と言うな」というように、子どもがその音をどういう意味で使っているかがわかる、そんなことばが出てくるのがこの頃なのです。

ただ、子どもが話せる単語は、ここからすぐに爆発的な勢いで増えていくわけではありません。先ほどの、ドイツ語を学習していた父親の子どももそうでした。話し始めて最初の半年ほど、単語の増え方は月に三〜五語といったところでは、

しかしそれが、一歳後半になると、月に三〇〜五〇語も増えるようになります。最初のゆっくりペースに比べれば、一〇倍のスピードです。この急激なスピードアップは、「語彙爆発ⁱⁱⁱ」と呼ばれます。この爆発的な勢いに、父親のドイツ語は置いていかれたのです。

さらに言うなら、子どもが爆発的な勢いで学んでいくのは、単語だけではありません。

一歳の誕生日を過ぎた頃の子どもの話し方と例えば、「ワンワン」や「ブーブ」のように、一度に一つの単語だけを言うという「一語発話」でした。しかし二歳になれば、子どもは「ワンワン イタ」のように単語をつなげた文を話すようになります。その文の長さはどんどん長くなっていきます。話すことのできる文の長さという点でも、子どもは爆発的な進歩を見せるのです。

(中略)

最初の頃は、話せる単語の増え方が月に三〜五語というペースだった子どもも、一歳後半になれば、月に三〇〜五〇というペースで新しい単語を覚えていくようになり、二歳頃には、平均で二〇〇の単語が話せるようになります。そのペースに合わせて、新しい外国語を学習しようという父親の試みは、やはりムボウ^aなものだったのでしょうか。このペースは、大人からみて、それほど「爆発的^b」で、ついていくのが難しいものだったのでしょうか。

受験業界に身を置くある人に、この話をしたことがあるのですが、その反応は、「二歳でたった二〇〇語ですか。拍子抜け^{iv}だな^x」というものでした。確かに、大人が本気になれば、一年で一〇〇〇語、一日あたり三語くらいだっただけで覚えられそうです。ではなぜ父親は、子どものペースについていけなくなったのでしょうか。子どもは、日々の生活のなかで、食べて遊んでこ^xとばを聞いて、と、言語の学習に集中できたけれど、父親は、家庭外での仕事もあり、家のなかでも子どもの世話やら、家事の分担やら、いろいろあつて忙しかったからでしょうか。確かにそれは大きな原因に違いありません。

ほかに、「子どもに比べて大人は頭もカタくなっているし、言語の学習には向かない」というのも、よく耳にする申し立てです。

実際に成人では、言語の使用や理解をつかさどる脳部位が卒中や事故などでダメージを受けると、言語に障害が出て、完全に元の状態に戻ることはありません。それに対して子ども、特に七、八歳くらいまでの子どもでは、同じように脳に損傷を受けて一度は言語を話せなくなっても、時間をかけて完全に回復することも少なくありません。

子どもの場合は、脳内の神経細胞の役割分担にまだ**ジュウナン性**があり、言語に関連した脳の部位（たいていは左半球）が損傷されても、ほかの部位がその機能を肩代わりすることができます。これはいわゆる「脳の可塑性」と言われるものであり、そんな「脳の柔らかさ」が子どもにあるのは確かです。

さらに、父親は既に日本語を身につけてしまっており、³新しい言語の学習はその日本語に邪魔されてうまくいかなかった、ということも考えられます。

たとえば、日本語話者にとってLとRの聞き分けが難しいとはよく耳にする話です。日本語では、Lのラ行とRのラ行があるわけではなく、ラ行は一つですので、LとRを区別して聞く必要はありません。しかし英語では、「right（正しい／右）」と「light（光）」が、意味の異なる別の単語であることからわかるように、LとRを区別します。LとRを区別しない日本語の聞き方をいったん身につけてしまった大人の場合、その「日本語用の聞き方」が、英語のLとRを聞き分けることを邪魔するのです。

それに対して、まだ何も言語というものを知らない赤ちゃんでは、新しい言語の学習を邪魔するものはありません。まっさらな状態から、LとRの音はどんなふう違うかを学んで、完璧に聞き分けられるようになる可能性を、まだ失っていません。ではひとことで「日本語母語話者が英語のLとRを区別できない」と言っても、いったいどれくらい「できない」ものなのでしょう。

このことを調べるための方法としては、「聴き取り」や「仲間はずれ探し」があります。「聴き取り」では、LやRの音が

含まれる単語や言語音を聞かせて、それはLなのかRなのかを答えてもらいます。また、「仲間はずれ探し」では、三つの音声（そのうち二つは/a/で残り一つは/ra/、あるいは、二つが/ra/で残り一つが/a/）を聞いてもらい、そのなかで一つだけ違っていたものを答えてもらいます。

しかし実際、このようにして調べてみると、むしろ日本語母語話者の聞き分けテストの正答率はそれほど悪くないことがわかります。ある研究では、アメリカに住んで半年から四年程度になる日本人（日本語母語話者で、中学校から英語を学び始めた人たち）に、/ra/と/a/の「聴き取り」をしてもらいました。すると、その正答率は九〇%を超えていました。

もちろん、アメリカ人（英語母語話者）ならほぼ一〇〇%正答できます。日本語母語話者のレベルはそれには及びませんが、**A** としても、LとRの聞き分けは「できない」「できるようにならない」となるほどではないのです。

また、聞いた音が「何の音やらよくわからない」ではなくて、「日本語の<ラ>に似ている」ということまでわかるなら、実はかなりうまくいっていると考えるべきなのかもしれません。

そこまでわかれば、自分が知っている単語のなかから候補を探すこともできます。また、知らない単語でも、「日本語のこの音に似ていた」と関連づけることができれば、音として覚えやすくなります。

このように考えると、既に身につけた言語は、別の言語の習得を難しくする面はありつつ、新しくその言語に取り組むための土台を与えてくれるものなのです。その意味では、大人は母語があるからこそ、母語を通じて、また母語を **B** として、新しい言語を理解することができるのだと言えます。音の聞き分けだけでなく、単語の意味でも、文法でも。

（中略）

大人は、言語がどういふものかについてのイメージを持っています。

A、言語はいくつもの、互いに聞き分けなければならない音からできていること、人による声質の違いやその時々⁴の気持ちによる話し方の揺れなどによる音の違いは無視しなければならないこと、そして、そもそも言語は、音声でほかの何かを表すものであることを知っています。そういうことがわかっていぶん、大人の方が言語の学習では子どもより有利である

ようにさえ見えてきました。

イ、どうして父親は子どもに置いていかれたのでしょうか。

ここで、例のエピソードをもう一度、思い出していただきたいのです。父親が決心したのは、子どもが一歳の誕生日を迎える頃でした。子どもはまだ、ことばらしいことばを話していませんでしたので、一緒に始めるにはちょうどよいタイミングだと父親は思ったのです。

ウ 「話さない」ということは、「何も学んでいない」ということではありません。特に、赤ちゃんの場合、言語を話す

ための **I** から、言語の **II** の聞き方、 **II** のかたまり（単語）は何かを意味していることの理解、そして、その **III** の探し方など、たった一言話すにもいろいろと準備が必要だったはずです。

そのようなわけで、ここで父親側の敗因としてまず挙げることができるのは、子どもが話せるようになる前に続けてきた努力を、父親はすっかり見落としていたということです。子どもは話さなくても学んでいたのです。

また新しい言語の学習をスタートしたあと、父親は、子どもが発するものと同じ意味の単語を覚えてただけで、あとはのんびりとしていました。これが父親側、第二の敗因です。父親がそうしているあいだにも、子どもはまわりで話されていることばに耳を傾け続け、目立った成果をなかなか挙げられないながらも、言語を学習し続けていたのです。

（針生悦子『赤ちゃんはことばをどう学ぶのか』による）

問一 文中の二重傍線部 (a・b) のカタカナを漢字に直したとき、同じ漢字を用いるものを、次のそれぞれの選択肢の中から選べ。

a ムボウ

18

- ① 企業の株価がボウ落する
- ② 議事の進行をボウ害する
- ③ 卑劣なボウ略をめぐらす
- ④ ボウ却のかなたに去った出来事
- ⑤ 山あいの村が観光地に変ボウする

b ジュウナン

19

- ① 建設作業にジュウ事する
- ② 苦ジュウの選択を迫られる
- ③ 利益を人件費にジュウ当する
- ④ ドローンを操ジュウする
- ⑤ 彼は優ジュウ不断な性格だ

問二 文中の波線部 (i~iv) のここでの意味として最も適当なものを、次のそれぞれの選択肢の中から選べ。

i エピソード

20

- ① 訓話
- ② 秘話
- ③ 挿話
- ④ 寓話
- ⑤ 講話

ii 流暢

21

- ① 一気にあふれ出る様子
- ② さまざまに変化する様子
- ③ たどたどしくも着実な様子
- ④ どこまでも果てしなく続く様子
- ⑤ よどみなくすらすらと出る様子

iii 語彙

22

- ① 様々なジャンルの用語
- ② 頭の中で生み出された表現
- ③ 個人の持つ単語の総体
- ④ 一定の水準にある語句
- ⑤ 習得が容易でない語群

iv 拍子抜け

23

- ① 調子が乱されること
- ② 張り合いがなくなること
- ③ 落ち着かない気分になること
- ④ あきれ果ててしまうこと
- ⑤ やる気が感じられないこと

問三 文中の空欄(A・B)を補うのに最も適当なものを、次のそれぞれの選択肢の中から選べ。

- | | | | | | | |
|---|----|-------|-------|--------|--------|---------|
| A | 24 | ① 観念的 | ② 逃避的 | ③ 自虐的 | ④ 侮蔑的 | ⑤ 楽観的 |
| B | 25 | ① テーマ | ② モデル | ③ シンボル | ④ モチーフ | ⑤ カテゴリー |

問四 文中の空欄(A・ウ)を補うのに最も適当なものを、それぞれ次の選択肢の中から選べ。ただし、同じものを繰り返し

選んではならない。ア 26、イ 27、ウ 28

- | | | | |
|--------|---------|--------|--------|
| ① あるいは | ② それなら | ③ しかし | ④ しかも |
| ⑤ たとえば | ⑥ というのは | ⑦ ところで | ⑧ なぜなら |

問五 文中の空欄(I・III)を補うのに最も適当なものの組み合わせを、次の選択肢の中から選べ。ただし、空欄IIは二箇所

ある。 29

- | | | |
|---------|--------|---------|
| ① I 滑舌 | II リズム | III 意味 |
| ② I 発声法 | II 抑揚 | III 指示物 |
| ③ I 聴力 | II 音 | III 表記 |
| ④ I 滑舌 | II 抑揚 | III 表記 |
| ⑤ I 発声法 | II 音 | III 意味 |
| ⑥ I 聴力 | II リズム | III 指示物 |

問六 文中の傍線部1〈子どもの話す単語〉とあるが、それはどういうものか。その説明として最も適当なものを、次の選択肢の中から選べ。

30

- ① 「ゴハン」や「ジドウシヤ」のような大人が日常的に使う単語の一部を省略したりつなぎ合わせたりして、小さな子どもでも発音しやすい語形になっているもの。
- ② 「ママ」のように両唇を使ったり「ブーブ」のように同音の繰り返しによる特定のリズムを作ったりして、子どもが自然に発せられる音のつくりになっているもの。
- ③ 大人の使う日本語には少ない、「ブーブ」のような実際の音や声をまねた擬音語、身振りや様子を表した擬態語のかわりに使われているもの。
- ④ 子どもは「マンマ」といった食べ物や「ママ」といった身の回りの人や物について強い関心を持っており、そのような関心の範囲にある事物を指し示すもの。
- ⑤ 「ゴハン」や「ジドウシヤ」は漢字で書くのが一般的だが、子どもはまだ知らないもので、「マンマ」や「ブーブ」といった仮名でも自然に書き表すことのできるもの。

問七 文中の傍線部2〈口にする〉は「言葉に出して言う」という意味の慣用句で、「換喩」という修辞法が使われている。

同じ「換喩」を用いた表現として最も適当なものを、次の選択肢の中から選べ。

31

- ① ミスをして思わず舌打ちした。
- ② 伯父の昔話には耳にたこができる。
- ③ 大切な試合に負けて唇を噛んだ。
- ④ 先輩の忠告で目から鱗が落ちた。
- ⑤ 海外に商売の手を広げるつもりだ。

問八 文中の傍線部3〈新しい言語の学習はその日本語に邪魔されてうまくいかなかった、ということも考えられます〉とあるが、筆者はこのことについてどのように考えているか。最も適当なものを、次の選択肢の中から選べ。

32

- ① 中学から英語を学び始めた日本語母語話者でも、LとRの聞き分けテストの正答率は英語母語話者のアメリカ人とは変わらないので、すでに身につけた言語は別の言語の習得に影響を与えるものではない。
- ② すでに身につけている言語は、別の言語の習得を難しくする側面もあるが、英語のLとRも日本語のラ行音に似ているという認識など、新たな言語に取り組むための土台を提供してくれるるので、むしろプラスになる。
- ③ エピソードの父親のように、日本語なら日本語を母語としてしっかりと身につけた人間にあっては、日本語が新しい言語の習得の大きな妨げになるのであり、母語は別の言語の習得にマイナスに作用する。
- ④ 人間にとって言語習得は一つの言語を母語としてきちんと身につけることこそが肝要なのであり、日本語母語話者にとって英語などの別の言語を学習するかどうかに本質的な重要性はない。
- ⑤ 日本語しか知らない人は日本語で捉えられた世界のありようしか知らないものであり、英語などの新たな言語を学習することによって別の世界の捉え方を学ぶことになるので、新しい言語の学習は大いにプラスにはたらく。

問九 文中の傍線部4〈言語は、音声ではかの何かを表すものである〉とあるが、その例として最も適当なものを、次の選択肢の中から選べ。

33

- ① 同じ動物を指すのに、日本語では「イヌ」、英語では「dog」という異なる表現を用いる。
- ② 同じ動物を指しながら、大人は一般に「イヌ」と言い、幼い子どもはしばしば「ワンワン」と言う。
- ③ 日本語では「イヌ」という音の連なりが、「犬」の意味や概念と結びついている。
- ④ 秋田犬やチワワなど様々な犬種を、同じ「イヌ」という言葉でまとめてしまう。
- ⑤ 英語話者の「dog」という発音は、日本語話者の「ドッグ」とはかなり異なる発音になる。

問十 文中の傍線部X(なぜ父親は、子どものペースについていけなくなったのか)とあるが、その根本的な理由を筆者はどのように考えているか。最も適当なものを、次の選択肢の中から選べ。

34

① 父親は、普段の仕事や家事に追われて、ことばの学習だけに意識を集中させることができなかったから。

② 子どもは、話せる単語の数が最初は月に三〜五語、一歳後半に三〇〜五〇語、二歳頃には約二〇〇語と増えていくが、頭の固くなった大人の父親にはそもそも無理な学習計画だったから。

③ 幼い子どもと違って、大人である父親は脳の神経細胞の役割の分化が進んでいて、日本語で固定された部位が新たな言語に対応することが難しかったから。

④ 父親は、日本語にはLのラ行とRのラ行の二種類があると思っていたために、ドイツ語のLとRの区別にかえて混乱してしまったから。

⑤ 子どもは、ほとんどことばを話さない段階でも、実は言語習得の不断の努力をしていたのだが、父親は、表面的な発話を見るばかりでそのことに気づけていなかったから。